総合都市研究　第52号　1994

子の学校歴と性差

― 母親の学校歴と教育観との関連を中心として ―

1．問題の所在と本稿の課題
2．調査データと分析枠組
3．子の性差と学校歴
4．教育観と性差
5．結論

久保田　滋*
直井道子**

要　　約

本稿においては、子の学校歴における性差について分析することにより、性という変数が、教育システムを媒介として序列化されていくプロセスを明らかにする。子の学校歴についてはその指標として、小学校から大学に至るまでの進学（公立、国立、私立）の相違)、学校の偏差値などを中心に用いた。

分析の手順はまず、子の性別と学校歴との関連について概観し、つぎに妻の学校歴を統制変数とし、子の性別と学校歴との関連を論じた。さらに母親の学校歴と父親の学校歴の組み合わせとの関連において子の学校歴における性差を分析し、また、教育投資行動や妻の教育観について検討した。

その結果、高校卒や、特に短大卒の妻において子の性による学校歴の差異がみられ、大卒、特に（偏差値48以上の大学出身）の妻においてその差異が減少する傾向にあること、夫の学校歴が妻の学校歴より高い場合に、子の学校歴における性差が強調される傾向にあること、妻の教育観によって、子の学校歴における性差が左右されること、妻の学校歴、妻の教育観、教育投資や子の学校歴における性差の三つは相互に関連しつつ、その連関図式において子の教育的地位の達成における性差を形成することなどが明らかになった。

1．問題の所在と本稿の課題

「女性の社会進出」が盛んに唱えられるようになって久しい。1985年には「男女雇用機会均等法」が成立し、雇用における「機会の平等」が制度的には保証されたこととなった。しかし、近年の経済不況のもとで「女性の就職難」が叫ばれ、とりわけ被害を被ったとされるのが就職を控えた四年制大学の女子学生であるともいわれる。また、教育における機会の平等に関しても、その限界性と

＊　東京都立大学大学院社会科学研究科社会学専攻博士課程
＊＊東京学芸大学教育学部助教授

「結果の不平等」の指摘がなされている[1]。戦後日本において重要な政治課題のひとつであった教育の「民主化」は、制度的に機会の平等を実現しようとするものであった。しかし、依然として性（ジェンダー）という属性的要因によって結果の平等が損なわれる現状に対していかなる議論が可能であろうか。業績主義的に構成されるべき教育システムが、ある一定の属性によって左右されるならば、それはいかなるプロセスによるのであろうか。そこで、本稿においては子の就学における性差に注目し、それが生成される背景、メカニズムを明らかにすることを試みることにする。

まず、ここでは子の就学を学校歴としてとらえる。学校歴とは、教育システムを媒介とした個人の選択、あるいは教育システムによる選別と排除の過程である。子は、高等学校、大学への進学において、望むと望まざるとに関わらず、学校の選択、あるいは進学／就職の選択を余儀なくされる。また、義務教育過程においても、国立、私立の小学校、中学校受験という選択肢が存在する。このような学校、進学の選択は、また「試験」を通しての選別／排除の過程でもある。そしてそのようなプロセスにおいて地位の序列化がなされるのである。そしてそのような序列化が性という変数とどのように結びついているのか、つまり、性別によって学校の利用がどのように異なってくるのかが問題となるのである。

次に、そのような学校歴における性差がどのような背景において生成されるのかが問題になる。その背景は大きく分けて二つの領域に分かれる（天野、1988、272－278頁）。第一の領域は、学校内部における過程であり、教室におけるカリキュラム、教師－生徒関係、生徒集団とその文化などが分析対象となる。そして、第二の領域は、学校外の諸条件、とりわけ「家庭」における階層的条件である。つまり、親と子の間における階層移動、あるいは階層再生産のプロセスが分析対象となる。本来ならば、これらの二つの領域を共に論じることが望ましいと考えられるが、本稿においては以下の調査によって得られたデータに基づき、後者の領域、とりわけ母親の学校歴、両親の学校歴のギャップ、母親のもつ教育観をその分析対象とする。

2．調査データと分析枠組

2．1　調査データの概要

本稿の分析に用いるデータは、1992年11月に東京都立大学都市研究センターが行った「教育と友人関係に関する調査」によるものである。調査は文京区、北区、町田市、青梅市に住む35歳以上49歳以下の女性を対象に郵送調査法で行われ、総抽出標本数4,860、有効回収票数2,306、回収率47.4％であった。そのうち本稿の分析で用いるサンプルは、全体としては、子供のいる対象者（2,127ケース、全体の92.2％）である。なお、長子の就学ステージによって子の学校歴に関するいくつかの変数が制限を受けるため、それぞれの分析においてケース数が異なっている。また、表記に関しては、基本的には対象者を「妻」、対象者の配偶者を「夫」、対象者の長子を「子」、または「子供」とした。

2．2　分析枠組

本稿において主たる被説明変数となるのは子の学校歴であるが、その指標としては長子の学校歴を用いる。それは主に以下のものによって構成される。

1. 小学校、中学校（、高等学校）における学校選択（公立／国立／私立）
2. 国立、私立の中学校、高校の偏差値ランキング[2]
3. 短大／大学への進学
4. 大学の偏差値ランキング[3]

分析の手順としては、まずこれらの学校歴変数と子の性別との関連をみる。そこから、教育システムの諸段階において顕在化する性差のあり方を明らかにする。

次に、妻の学校歴を統制変数として投入し、子の性と学校歴の関連を分析する。妻の学校歴としては、その最終学歴を基礎とし、大学卒に関しては、その偏差値による序列を考慮した形で構成す

る[4]。そこでは、「中卒」、「高校卒」、「短大卒」、「大卒（偏差値48未満）」、「大卒（偏差値48以上）」の5区分を用いる。母親の教育程度によって、子の進路選択における性差がどのように変わってくるのかを考察する。

さらに妻学校歴と夫学校歴の組み合わせ別に同様の分析を試みる。妻と夫の学校歴について、「中卒」、「高校卒」、「短大卒」、「大卒（偏差値48未満）」、「大卒（偏差値48以上55未満）」、「大卒（偏差値55以上）」の6区分を採用し、それが妻と夫でどちらが上回っているか、あるいは等しいかで三つに分類する。そこでは、妻と夫の教育的地位のずれや一致が、子の学校歴と性との関連にどのような違いをもたらすのかを論じる。

また、より具体的なレベルにおける親の子に対する教育的な働きかけを明らかにするために、親の教育投資行動と子の性差の関連について検討する。教育投資行動としては、「子の塾通い」をその指標として用いる。

そして最後に、妻の教育観が、その教育投資行動や子供の学校歴における性差に及ぼす影響について分析する。妻の学校歴・就業とこれらの教育観、教育観と教育投資行動、そして教育観と子の学校歴のそれぞれの関連について考察する。

3．子の性差と学校歴

3．1　子の性差と学校歴の概観

まず、子の性別と学校歴との関連を概観することから分析をはじめることにする。表1は小学校、中学校、高等学校それぞれの段階において、公立、国立、私立といった学校選択を子の性別によって集計したものである。小学校と中学校において私立の学校へと進学する比率が、男子より女子で高くなっている。しかし、国立、私立の中学校に関して、学校の偏差値による序列といった観点からみると、男子の偏差値の平均が、女子の平均を上回っているのがわかる（表2）。これらから、私立の小学校、中学校に進学するということが女子にとってもつ意味と、男子にとってもつ意味との間にある一定の差異が存在するということが考えられる。男子の私立校進学が、上位の有名大学への進学を明確に目指したものであるのに対し、女子の場合には、むしろ小学校から、あるいは中学校から一貫の、「女らしさ」を強調したいわゆる「女子校教育」を親が志向したものであると推測することもできよう[5]。

表1　子の性別と学校選択

	子の学校歴			
	公立	国立	私立	計（実数）
小学校	**			
男子	93.8	2.6	3.6	100.0（1060）
女子	89.6	2.4	8.0	100.0（942）
全体	92.8	2.5	5.6	100.0（2002）
中学校	**			
男子	83.0	3.0	14.0	100.0（833）
女子	76.3	2.7	20.9	100.0（769）
全体	79.8	2.9	17.4	100.0（1602）
高等学校	**			
男子	40.8	3.5	55.7	100.0（625）
女子	40.7	2.0	57.3	100.0（607）
全体	40.7	2.8	56.5	100.0（1232）

** χ二乗検定　1％有意

表2　子の性別と学校の偏差値

	平均値（実数）
中学校（国立・私立）**	
男子	61.07（125）
女子	58.34（163）
全体	59.53（288）
高等学校（私立・国立）**	
男子	64.61（263）
女子	62.33（254）
全体	63.49（517）

** T検定　1％有意

高等学校については、公立、国立、私立の学校選択における性差はみられなかったが、国立、私立校の偏差値においては、男女の差がみられた（表2)。男子の偏差値の平均が女子の平均を上回っているが、これはそのまま大学への進学率に反映するものだと思われる。男子の65.9％が大学に進学しているのに対し、女子は42.9％にとどまっており、短大に23.7％が進学している（表3)。

しかし、大学進学者における偏差値ランキングによる分析においては、男女の有意な差はみられなかった。大学進学者の中での性差はむしろ大学の「ブランド」や進学する「学部」にみられる。男子においては、「旧帝大」、「早稲田・慶応」といった大学へ進学する比率が高く、女子は「その他の私立」の比率が高い傾向にある。また学部については、男子が法学部、経済・経営学部、工学部などに進学する比率が高いのに対し、女子は文学・教養学部、教育学部、芸術・音楽関連、家政学部などに進む比率が高い。これらの大学の「ブランド」、「学部」といったものが、男子にとっては一般的に「就職に有利」であるとされるものに偏っていることを考慮するならば、それらの選択は単に「好き・嫌い」や、「向き・不向き」によるものであるとして片付けるわけにはいかなくなる。大学進学による「教育的地位の獲得」が、男子においてはそのまま「職業的地位の獲得」と結び付き、女子においてはそのようにはならないとするならば、その差はどのようなメカニズムで生成されるのがが次に問題となる。

ここまでの分析では、子の学校歴における諸段階のそれぞれにおいて、進学・受験を通して性による選別が繰り返しおこなわれるということがわかった。そのような選別の結果として、子の最終的な教育的地位における性差が形成され、またそれが職業的地位における性差へと転化する可能性をはらんでいる。そして次には、このような教育システムの通じて顕在化する性差を、母親の学校歴との関連において考察することによって、その背景の一端を明らかにすることを試みる。

3．2　妻の学校歴と子の性差

日本のSSM研究においても1985年調査に初めて女性を対象としたものが行われた。岩永雅也はそのデータを用い、女性の初職達成が「『母親の学歴→教育アスピレーション→学歴→初職』というパスで最もL強く規定されている」という知見を示している（1990、116頁)。つまり、母親が娘の地位達成に対して重要な位置を占めることが明らかにされている。このような知見をふまえ、次には妻（母親）の学校歴が子の学校歴における性差に与える影響についての分析を試みることにする。

小学校に関しては、全体としては、妻の学校歴が高くなるにしたがって、子を私立の学校に進学させる比率が高くなる傾向があり、また、大卒（偏差値48以上）において国立の学校に子を進学させる比率が特に高い（表4)。子の性別については、短大卒と大卒（偏差値48以上）において子の私立進学との関連がみられる。どちらにおいても男子の約3倍の割合で女子が私立に進んでいる。

また中学校に関しては、全体としては妻学校歴と私立進学の間に、小学校と同じような傾向がみられ、妻の学校歴が高くなるにつれ、子の国・私立進学の比率が高くなっているが、子の性別と子の中学校進学の間には有意な関連がみられなかった（表4)。しかし、国立・私立中学の偏差値ランキングの分析においては、高卒、そして特に短大卒において子の性別による差が確認できる。同様に、国立・私立の高等学校の偏差値の分析でも妻の学校歴が高卒、短大卒の場合において子供の性別による差がみられる（表5)。

表3　子の性別と短大・大学進学

	子の学歴			
	中・高卒	短大	大学	計（実数）
男子	31.9	2.2	65.9	100.0（405）
女子	33.4	23.7	42.9	100.0（401）
全体	32.6	12.9	54.5	100.0（806）

＊＊　χ二乗検定　1％有意

表4　妻学校歴にみた、子の性別と小・中学校

	子の小学校				子の中学校			
	公立	国立	私立	計（実数）	公立	国立	私立	計（実数）
妻：中卒								
男子	96.4	1.2	2.4	100.0（ 84）	94.6	1.4	4.1	100.0（ 74）
女子	97.4	2.6	0.0	100.0（ 76）	98.6	0.0	1.4	100.0（ 71）
全体	96.9	1.9	1.3	100.0（ 160）	96.6	0.7	2.8	100.0（ 145）
妻：高卒								
男子	97.4	0.6	2.1	100.0（ 535）	91.0	0.9	8.1	100.0（ 446）
女子	95.3	1.0	3.7	100.0（ 488）	86.4	0.7	12.9	100.0（ 425）
全体	96.4	0.8	2.8	100.0（1023）	88.7	0.8	10.4	100.0（ 871）
妻：短大卒								
男子	92.0	4.6	3.4	100.0（ 175）	73.2	3.9	22.8	100.0（ 127）
女子	86.1	3.2	10.8	100.0（ 158）＊	60.2	3.4	36.4	100.0（ 118）
全体	89.2	3.9	6.9	100.0（ 333）	66.9	3.7	29.4	100.0（ 245）
妻：大卒（偏差値48未満）								
男子	88.3	2.9	8.7	100.0（ 103）	71.6	3.0	25.4	100.0（ 67）
女子	77.5	3.4	19.1	100.0（ 89）	55.4	7.1	37.5	100.0（ 56）
全体	83.3	3.1	13.5	100.0（ 192）	64.2	4.9	30.9	100.0（ 123）
妻：大卒（偏差値48以上）								
男子	84.0	8.5	7.5	100.0（ 106）	56.0	10.7	33.3	100.0（ 75）
女子	72.3	5.3	22.3	100.0（ 94）＊	40.6	10.1	49.3	100.0（ 69）
全体	78.5	7.0	14.5	100.0（ 200）	48.6	10.4	41.0	100.0（ 144）

＊　χ二乗検定　5％有意

子の短大・大学進学と妻の学校歴との間にも強い関連がみられる（表6）。全体としては、妻の学校歴が高くなるにしたがって大学への進学率が高くなっている。中卒の母をもつ子の大学進学率が16.7％であるのに対し、大卒（偏差値48以上）の母をもつ子の進学率が91％と圧倒的な差がみられる。性差に関しても、高卒と短大卒の妻の場合に、子の大学進学との強い関連がみられ、とりわけ短大卒においては、男子の92.5％が大学に進学しているのに対し、女子は53.7％にすぎないという結果がでている。短大進学に関しても、妻が高卒、短大卒の場合において女子の比率が高くなっている。また、逆に妻が大卒（偏差値48以上）の場合には、大学進学率に男女差がほとんどみられず、女子の短大進学率もいちばん低くなっている。

さらに、大学の偏差値の分析においては、妻の学校歴が中卒と短大卒の場合において有意な性差がみられ、男子が女子を上回っているが、その一方で大卒（偏差値48以上）の場合には有意な性差はみられず、むしろ女子の偏差値の平均が、男子よりも若干高い値を示している（表7）。

小学校から大学までの子の学校歴を通して、子の教育的地位の獲得に妻の学校歴が大きく影響していることが、これまでの分析において明らかにされた。そして、特に妻が短大卒の場合に一貫して子供の性別による学校歴の差がみられた。また、

表5　妻学校歴にみた子の性別と中学校、高等学校偏差値（国立・私立）

	平均値（実数）	
	中学校（国・私立）	高等学校（国・私立）
妻：中卒		
男子	51.00（ 2）	61.39（ 13）
女子	45.00（ 1）	56.57（ 7）
全体	49.00（ 3）	59.60（ 20）
妻：高卒		
男子	60.89（ 35）	63.59（ 134）
女子	56.80（ 55）*	61.07（ 123）**
全体	58.39（ 90）	62.38（ 257）
妻：短大卒		
男子	61.79（ 33）	66.98（ 45）
女子	57.13（ 40）**	63.40（ 53）**
全体	59.23（ 73）	65.04（ 98）
妻：大卒（偏差値48未満）		
男子	59.59（ 17）	64.50（ 22）
女子	57.78（ 23）	61.36（ 25）
全体	58.55（ 40）	62.83（ 47）
妻：大卒（偏差値48以上）		
男子	61.52（ 29）	66.15（ 34）
女子	62.30（ 37）	66.92（ 36）
全体	61.95（ 66）	66.54（ 70）

** T検定1％有意　　* T検定5％有意

表6　母親学校歴別にみた子の性別と短大・大学進学

	子の学歴			
	中・高卒	短大	大学	計（実数）
妻：中卒　（**）				
男子	73.3	0.0	26.7	100.0（ 45）
女子	80.4	11.8	7.8	100.0（ 51）
全体	77.1	6.3	16.7	100.0（ 96）
妻：高卒　**				
男子	35.3	3.1	61.6	100.0（224）
女子	33.6	29.1	37.2	100.0（223）
全体	34.5	16.1	49.4	100.0（447）
妻：短大卒　**				
男子	7.5	0.0	92.5	100.0（ 53）
女子	13.0	33.3	53.7	100.0（ 54）
全体	10.3	16.8	72.9	100.0（107）
妻：大卒（偏差値48未満）				
男子	8.3	0.0	91.3	100.0（ 23）
女子	4.3	14.3	71.4	100.0（ 21）
全体	11.4	6.8	81.8	100.0（ 44）
妻：大卒（偏差値48以上）				
男子	6.1	3.0	90.9	100.0（ 33）
女子	2.9	5.9	91.2	100.0（ 34）
全体	4.5	4.9	91.0	100.0（ 67）

**　χ二乗検定　1％有意
（**）χ二乗検定　1％有意であるが、最小期待度数が5未満

妻の学校歴別にみて、高校の序列における性差が、子の短大、大学進学率における性差につながっていると考えることができる。このように考えるならば、子の教育的地位の獲得に関する性差は、高校進学時までにある程度方向づけられてしまっているということがいえるであろう。また、母親が上位の大学を卒業しているという条件によって、女子が性差の障壁をクリアーしやすい位置に立つことができるということをこの分析の結果が示している。

3．3　妻学校歴と夫学校歴との組み合せによる分析

妻の学校歴による分析に続き、ここでは妻と夫のそれぞれの学校歴の関連に着目した分析を試みる。

階層研究において、女性の社会的地位はどのように構成されるのかという問題に対してはいくつかの議論がなされている[6]。そこで中心的な問題となっているのは、世帯を単位とし、夫の社会的地位によって妻の社会的地位を論じることの有効性であり、また夫の社会的地位と妻の社会的地位との関連についてであった。

表7　妻学校歴にみた子の性別と大学偏差値

	平均値（実数）
妻：中卒　＊	
男子	61.50（ 10）
女子	55.00（ 1）
全体	60.00（ 13）
妻：高卒	
男子	60.88（125）
女子	59.39（ 76）
全体	60.32（201）
妻：短大卒　＊	
男子	62.88（ 43）
女子	58.63（ 24）
全体	61.36（ 67）
妻：大卒（偏差値48未満）	
男子	60.25（ 20）
女子	58.86（ 14）
全体	59.68（ 34）
妻：大卒（偏差値48以上）	
男子	63.57（ 30）
女子	64.37（ 30）
全体	63.97（ 60）

＊ T検定5％有意

本稿における説明すべき変数は、女性の社会的地位自体ではないが、子の教育的地位の獲得と性との関連を説明するのに、妻の教育的地位と夫の教育的地位との関連がどのような意味をもってくるのかについて検討することにする。つまり、子の学校歴における性差が、妻と夫の学校歴のセットによって説明することが可能であるかについての分析を試みる。ここでは、夫の学校歴が妻の学校歴を上回っているケース、妻の学校歴と夫の学校歴が同程度であるケース、妻の学校歴が夫の学校歴を上回っているケースの3つによって変数を構成する[7]。

表8は妻学校歴と夫学校歴との組み合せ別に、子の性別と小学校、および中学校進学との関連を集計したものである。小学校において、全体としては妻学校歴より夫学校歴が高い場合において、私立へ進学する比率が最も高い。また、その場合においてのみ子の性別と小学校進学とに関連がみられ、女子が私立に進学する比率が高くなっている。中学校に関しても、同じような傾向を読み取ることができるが、妻学校歴より夫学校歴が高い場合でも、小学校ほど明確には子の性別との関連はみられない。

表8　妻学校歴・夫学歴の組み合わせ別にみた、子の性別と小学校、中学校

	子の小学校				子の中学校			
	公立	国立	私立	計（実数）	公立	国立	私立	計（実数）
妻学校歴＜夫学校歴								
男子	92.7	3.2	4.1	100.0（440）	77.3	3.5	19.2	100.0（344）
女子	85.3	3.0	11.7	100.0（394）＊＊	69.8	3.1	27.2	100.0（324）
全体	89.2	3.1	7.7	100.0（834）	73.7	3.3	23.1	100.0（668）
妻学校歴＝夫学校歴								
男子	95.4	1.3	3.2	100.0（372）	88.3	1.7	10.0	100.0（300）
女子	93.2	1.2	5.6	100.0（324）	82.9	1.5	15.6	100.0（263）
全体	94.4	1.3	4.3	100.0（696）	85.8	1.6	15.6	100.0（563）
妻学校歴＞夫学校歴								
男子	95.3	0.0	4.7	100.0（106）	90.5	0.0	9.5	100.0（ 74）
女子	93.9	3.1	3.1	100.0（ 98）	80.5	3.9	15.6	100.0（ 77）
全体	94.6	1.5	3.9	100.0（204）	85.4	2.0	12.6	100.0（151）

＊＊　χ二乗検定1％有意

表9　妻学校歴・夫学校歴の組み合わせ別にみた、子の性別と中学校、高等学校偏差値（国立・私立）

	平均値（実数）	
	中学校（国・私立）	高等学校（国・私立）
妻学校歴＜夫学校歴		
男子	61.89（ 70）	65.43（126）
女子	58.38（ 93）**	63.06（139）**
全体	59.88（163）	64.19（265）
学校歴＝夫学校歴		
男子	59.52（ 31）	63.24（ 84）
女子	57.20（ 40）	61.44（ 66）
全体	58.21（ 71）	62.45（150）
学校歴＞夫学校歴		
男子	58.00（ 7）	62.06（ 18）
女子	58.92（ 12）	60.72（ 18）
全体	58.58（ 19）	61.39（ 36）

＊＊Ｔ検定１％有意

表10　妻学校歴・夫学校歴の組み合わせ別にみた、子の性別と短大・大学進学

	子の学歴			
	中・高卒	短大	大学	計（実数）
妻学校歴＜夫学校歴＊＊				
男子	16.7	1.2	82.1	100.0（162）
女子	23.1	26.0	50.9	100.0（173）
全体	20.0	14.0	66.0	100.0（335）
妻学校歴＝夫学校歴＊＊				
男子	40.5	2.0	57.4	100.0（148）
女子	38.4	23.2	38.4	100.0（125）
全体	39.6	11.7	48.7	100.0（273）
妻学校歴＞夫学校歴				
男子	48.4	6.5	45.2	100.0（ 31）
女子	42.1	23.7	34.2	100.0（ 38）
全体	44.9	15.9	39.1	100.0（ 69）

＊＊　χ二乗検定１％有意

しかし、国立・私立の中学校の偏差値の分析においては、妻学校歴より夫学校歴が高い場合に性差がみられ、男子の平均が、女子を上回っている（表9）。また、国立・私立の高等学校の偏差値に関しても、同様の性差が存在する。

大学への進学率に関しても、妻学校歴より夫学校歴が高い場合に最も高く、また男子の進学率が82.1％であるのに対し、女子は50.9％と性による大きな差異がみられる（表10）。そして大学の偏差値についても、妻学校歴より夫学校歴が高い場合に性差がみられ、男子の平均が、女子を上回っており、その他の場合には有意な差はみられない（表11）。

表11　妻学校歴・夫学校歴の組み合わせ別にみた、子の性別と大学偏差値

	平均値（実数）
妻学校歴＜夫学校歴＊	
男子	62.12（120）
女子	59.95（ 82）
全体	61.24（202）
妻学校歴＝夫学校歴	
男子	60.48（ 81）
女子	60.68（ 41）
全体	60.55（122）
妻学校歴＞夫学校歴	
男子	60.64（ 11）
女子	60.75（ 12）
全体	60.70（ 23）

＊　Ｔ検定５％有意

以上の分析により、小学校から大学までの子の学校歴を通して、妻学校歴より夫学校歴が高い場合に明確な性差が現れることがわかった。これは、妻の教育的地位と夫の教育的地位の格差が、子の教育を通じて新たな性差として再生産されていくものであると解釈することができるであろう。しかし、妻の学校歴が夫の学校歴より高い場合においても、高等学校以降の学校歴において全体としては女子が男子より優位にたつことがないことを考慮するならば、妻と夫の学校歴の関連が、男子にとってのみ有利な一定のベクトルを示しているに過ぎないことがわかる。

3．4　教育投資行動と性差

次に、より具体的な親の子供への教育投資行動における性差ついて若干触れることにする。

表12は、妻学校歴と夫学校歴に、子の性別と小学校時に塾通いとを集計したものである。ここでもやはり、妻学校歴により夫学校歴が高い場合にのみ変数間の有意な関連がみられる。そこでは、学習塾に「受験のために通った」、「受験のためでなく通った」の両方において男子の比率が女子に勝っており、男子の「通わなかった」比率が低い値を示している。そして、子が中学校時の教育投資行動においても、これと同様な結果が得られている。妻の教育的地位と夫の教育的地位の格差が、より具体的な教育的な働きかけにおいても、性差を再生産するといえるであろう。

4　教育観と性差

次に妻の教育観について、妻の学校歴と就業、そして教育投資行動と子の学校歴における性差との関連に注目しつつ分析する。

教育観については、子の性別による教育態度の違いについて、「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てたい／男女の区別なく、同じように育てたい」の二つの意見のどちらに近いかを聞き、また子の学歴獲得の効用について、「子供の将来の生活は、学歴によってかなり決ってしまう／子供の将来の生活は、学歴とはあまり関係がない」の二つの意見についてどちらに近いかを聞いている。

表13は妻の学校歴と二つの教育観との有意な関連を示したものである。まず子の性別による教育態度の違いにであるが、妻の学校歴が高くなるにつれて「男らしく・女らしく」と答える比率が低

表12　妻学校歴・夫学校歴の組み合わせ別にみた、子の性別と教育投資行動（学習塾）

	子が小学校時の学習塾通い			
	受験のために通った	受験のためでなく通った。	通わなかった	計（実数）
妻学校歴＜夫学校歴＊＊				
男子	26.6	29.5	43.8	100.0（447）
女子	23.6	19.6	56.8	100.0（403）
全体	25.2	24.8	50.0	100.0（850）
妻学校歴＝夫学校歴				
男子	12.5	30.8	56.7	100.0（367）
女子	15.1	26.7	58.2	100.0（318）
全体	13.7	28.9	57.4	100.0（685）
妻学校歴＞夫学校歴				
男子	14.4	28.8	56.7	100.0（104）
女子	12.8	31.9	55.3	100.0（ 94）
全体	13.6	30.3	56.1	100.0（198）

＊＊　χ二乗検定1％有意

くなり、「男女の区別なく」と答える比率が高くなっていることがわかる。また、子の学歴獲得の効用についても、短大卒と大卒（偏差値48未満）の比率が若干逆転している以外は、概ね妻の学校歴が高くなるにつれて「子供の将来は学歴で決る」と答える比率が高くなり、「学歴とは関係がない」と答える比率が低くなっている。つまり、高い学校歴をもつ妻ほど、教育における性差に関してリベラルな態度をもち、またその一方で学歴獲得の効用を支持するといった傾向がみられるのである。

次に、表14は母親の就業と二つの教育観との有意な関連を示したものである。これらで特徴的なのは、フルタイムの就業者において「男女の区別なく」という意見をもつ割合が高く、また、自営・家族従業員において「子供の将来は学歴とは関係がない」という意見をもつ割合が高くなっていることである。これらの傾向は、フルタイム就業層と自営・家族従業層の経済的基盤によって説明することが可能であろう。フルタイム就業層は妻個人の収入によって、家計を一定の割合で担っていることが想像でき、それによって男性である夫に対して自立した地位を有している。ゆえに、妻－夫関係における一定の平等性を意識し、それが自分の子供に対する教育態度に反映させるであろうし、また、自営・家族従業層は家業を有し、それが子へと受け継がれる可能性を考えたときに、子供の地位達成に対する学歴獲得の必要性を意識せずにすむであろう。

さて、これら妻の教育観が教育投資行動や子の学校歴における性差とどのように関連するのであ

表13　妻学校歴と妻の教育観（教育と性差／子供の将来と学歴）

妻の教育観（教育と性差）			
	男の子は男らしく、女の子は女らしく	男女の区別なく、同じように育てたい	計（実数）
妻学校歴＊＊			
中卒	67.3	32.7	100.0 (162)
高卒	61.2	38.8	100.0 (1066)
短大卒	53.8	46.2	100.0 (357)
大卒（偏差値48未満）	43.4	56.6	100.0 (212)
大卒（偏差値48以上）	34.5	65.5	100.0 (220)
全体	55.6	44.4	100.0 (2017)

妻の教育観（子供の将来と学歴）			
	子供の将来は、かなり学歴で決る	子供の将来は、学歴とは関係がない	計（実数）
妻学校歴＊＊			
中卒	48.8	51.2	100.0 (162)
高卒	55.6	44.4	100.0 (1065)
短大卒	62.3	37.7	100.0 (355)
大卒（偏差値48未満）	62.1	37.9	100.0 (211)
大卒（偏差値48以上）	63.6	36.4	100.0 (220)
全体	57.8	42.2	100.0 (2013)

＊＊　χ二乗検定1％有意

表14　妻の就業と妻の教育観（教育と性差／子供の将来と学歴）

	妻の教育観（教育と性差）		
	男の子は男らしく、女の子は女らしく	男女の区別なく、同じように育てたい	計（実数）
妻の就業＊＊			
フルタイム	46.2	53.8	100.0（494）
パート	60.4	39.6	100.0（419）
自営・家族従業員	58.9	41.1	100.0（270）
専業主婦	56.4	43.6	100.0（834）
全体	55.0	45.0	100.0（2017）

	妻の教育観（子供の将来と学歴）		
	子供の将来は、かなり学歴で決る	子供の将来は、学歴とは関係がない	計（実数）
妻の就業＊＊			
フルタイム	58.4	41.6	100.0（493）
パート	60.4	39.6	100.0（419）
自営・家族従業員	47.9	52.1	100.0（267）
専業主婦	59.3	40.7	100.0（833）
全体	57.8	42.2	100.0（2012）

＊＊　χ二乗検定1％有意

ろうか。第一に「男らしく／女らしく育てたい」という教育観をもつ層において子の性別と教育投資行動との関連がみられ、男子をより積極的に塾へと通わせる比率が高い（表15）。また、第二に、「子供の将来は学歴で決る」という教育観をもつ層においても同様の関連がみられる。さらに、国立・私立の中学校、高等学校の偏差値の分析においても、同様に「男らしく／女らしく育てたい」、「子供の将来は学歴で決る」の二つの教育観を有する層において、それぞれ子供の性別による差異がみられる（表16）。そしてさらに、全体としては「男女の区別なく」と「学歴で決る」といった教育観を妻がもつ層と、「男らしく・女らしく」と「学歴とは関係がない」といった教育観をもつ層との間で、それぞれ中学校、高等学校の偏差値の平均に有意な差がみられ、前者が後者に比べ高い値を示している[8]。つまり、これらの妻のもつ教育観が直接妻の教育投資行動を左右し、また子供の教育的社会化に一定の影響を及ぼすと考えられる。

ここで注目すべき点は、「男らしく／女らしく育てたい」という教育観と「子供の将来は学歴で決る」という教育観は、妻の学校歴との関連において、正反対のベクトルを有しているのである（表13）。妻の学校歴が高くなるにつれ、前者の教育観をもつ比率は低くなり、一方後者の教育観をもつ比率は高くなる傾向にある。つまり、乱暴にいえば、子の学校歴における性差をもたらすと考えられる妻の性別役割志向と学歴志向が、妻の学校歴に関してはそれぞれ負と正の関連をもつということである。

この問題をさらに検討するために、妻学校歴と二つの教育観を組み合わせた変数との関連をみることにする（表17）。この分析によって、高卒、短大卒においては性別役割志向と学歴志向のセット

表15 妻の教育観別にみた、子の性別と教育投資行動（学習塾）

	子が小学校時の学習塾通い			
	受験のために通った	受験のためでなく通った。	通わなかった	計（実数）
男らしく／女らしく**				
男子	22.2	31.4	46.4	100.0 (612)
女子	19.3	25.2	55.5	100.0 (503)
全体	20.9	28.6	50.5	100.0 (1115)
男女の区別なく				
男子	18.1	26.9	55.1	100.0 (443)
女子	19.0	22.9	58.1	100.0 (437)
全体	18.5	24.9	56.6	100.0 (880)
学歴で決る**				
男子	25.7	30.3	44.0	100.0 (641)
女子	23.3	23.1	53.5	100.0 (523)
全体	24.7	27.1	48.3	100.0 (1164)
学歴とは関係ない				
男子	12.1	28.3	59.6	100.0 (413)
女子	14.0	25.4	60.5	100.0 (413)
全体	13.1	25.4	60.5	100.0 (826)

** χ二乗検定1％有意

表16 妻の教育観別にみた、子の性別と中学校、高等学校偏差値（国立・私立）

	平均値（実数）	
	中学校（国・私立）	高等学校（国・私立）
男らしく／女らしく		
男子	60.58 (74)	63.81 (156)
女子	56.82 (88)**	60.72 (145)**
全体	58.54 (162)	62.32 (301)
男女の区別なく		
男子	61.78 (51)	65.78 (107)
女子	60.12 (74)	64.46 (108)
全体	60.80 (125)	65.12 (215)
学歴で決る		
男子	62.21 (86)	65.16 (171)
女子	59.11 (100)**	62.75 (145)**
全体	60.54 (186)	64.05 (316)
学歴とは関係ない		
男子	58.56 (39)	63.54 (90)
女子	57.07 (61)	61.73 (106)
全体	57.65 (100)	62.56 (196)

**T検定1％有意

表17　妻学校歴と妻の二つの教育観（教育と性差／子供の将来と学歴）

	妻の教育観（教育と性差×子供の将来と学歴）				
	男らしく女らしく／学歴で決る	男らしく女らしく／学歴と関係ない	男女の区別なく／学歴で決る	男女の区別なく／学歴と関係ない	計（実数）
妻学校歴＊＊					
中卒	32.1	35.2	16.7	16.0	100.0（ 162）
高卒	35.7	25.4	19.8	19.0	100.0（1063）
短大卒	37.2	16.9	25.1	20.8	100.0（ 355）
大卒（偏差値48未満）	26.5	16.6	35.5	21.3	100.0（ 211）
大卒（偏差値48以上）	24.7	10.0	38.8	26.5	100.0（ 219）
全体	33.5	22.1	24.2	20.1	100.0（2010）

＊＊　χ二乗検定1％有意

の比率が最も高く、大卒、とりわけ（偏差値48以上）において男女平等志向と学歴志向のセットの比率が最も高くなっているのがわかる。

先でみたように高卒と、特に短大卒の妻のもとで、子の性差が強調される傾向にあったことを考慮するならば、ここにおいて妻の学校歴、妻の教育観、教育投資や子の学校歴における性差の三つが、一つの連関図式において明らかにされたことになる。すなわち、高卒と短大卒、とりわけ短大卒の妻は、性別役割志向の教育観と学歴志向の教育観とをセットでもつ傾向にあり、教育投資や子の学校歴における性差を形成しやすい。また、大卒、とりわけ上位校を卒業した妻は、男女平等志向の教育観と学歴志向の教育観をセットでもつ傾向にあり、教育投資や子の学校歴における性差を形成せず、むしろ子を上位の学校に進学させ、その教育的地位を再生産する。

5　結論

本稿においては、子の学校歴における性差について、妻の学校歴、妻と夫の学校歴の組み合わせ、教育投資行動、教育観などとの関連に注目しつつ分析した。以下、この分析で得られた主要な知見を整理してみる。

1. 子の学校歴と子の性別の間には有意な関連があり、小学校から大学に至るそれぞれのステージにおいて子の性による選別が繰り返される。
2. 妻の学校歴は、子の学校歴における性差に影響する。高校卒や、特に短大卒の妻において子の性による学校歴の差異が顕著にみられ、大卒、特に（偏差値48以上）の妻においてその差異が減少する傾向にある。
3. 妻学校歴と夫学校歴の組み合わせによって、子の学校歴における性差が左右される。夫の学校歴が妻の学校歴より高い場合に、子の学校歴における性差が強調される傾向にある。
4. 妻学校歴と夫学校歴の組み合わせは、教育投資行動における性差に対しても影響をもたらす。夫の学校歴が妻の学校歴より高い場合に、子供の塾通いにおける性差が強調される傾向にある。
5. 妻の教育観によって、子の学校歴における性差が左右される。子供の教育における「性別役割志向」と「学歴志向」とが、教育投資行動や子の学校歴における性差をもたらす傾向にある。
6. 総じて、妻の学校歴、妻の教育観、教育投資や子の学校歴における性差の三つは相互に関連をもち、その連関図式において子の学校歴、教育的地位の達成における性差が形成される。

これらの知見からわかることは、子の教育的地位の達成における性差を形成する重要なエージェントとして妻を位置づけるならば、そこには彼女

の学校歴や、就業、夫との関係性といった客観的な条件と、彼女らの性別役割観といった主観的な志向性の両者が存在するということである。そして、その二つの側面は相互に絡み合いながら、教育投資行動として実践される。言いかえるならば、性別という生得的な異質性が、家庭内における社会化のプロセスと、教育システムによる選別と排除のプロセスを通して、子の教育的地位という形で階層・序列化されるといえる。しかし、そのような選別／排除も、現行の教育システムに対する権威づけのプロセスぬきに成し遂げられることは考えられない。妻が「子供の将来は、学歴によってかなり決ってしまう」という意見を支持するとき、それは消極的にせよ、積極的にせよ、幾度となく選別と排除を繰り返す教育システムばかりか、それによってもたらされる「結果の不平等」までも容認してしまっている。ブルデュー（1970）は、教育における「権威」の正統性が、教育システムがはらむ恣意性を隠蔽し、再生産を可能にする一つの条件となることを指摘しているが、この分析結果においてもその命題が支持されていることになる。

そして、このような論点をふまえ、教育における性差の研究をどのように進めていくことが可能であろうか。まず、本稿における議論をさらに深めるために、両親の職業的地位や出身階層との関連、階層的に分化された下位文化をより明確に析出することが有効であろう。それには、よりミクロには家庭内における親子間のコミュニケーションのあり方や、子の教育や職業に対するアスピレーション、よりマクロには教育と産業構造との関連やその政治的効果なども視座に収めていくことが必要となるであろう。

注）

(1) 教育におけるジェンダーと不平等の問題に関しては、フェミニズム、階層・階級研究、教育社会学など様々な領域においてなされている。それらを整理・紹介したものとして神田道子他（1985）、天野正子（1988）、森繁男（1992）などがある。

(2) 子の国立、私立の中学、高等学校（普通科）については、それぞれの学校名を聞き、旺文社『平成5年入試用中学校受験案内』を参考に偏差値をアフター・コードをおこなった。

(3) 子の大学については、その大学名、学部を聞き、河合出版（河合塾）『栄冠をめざして』VOL.3 1992を参考に偏差値をアフター・コードをおこなった。

(4) 妻の出身大学については、その大学名、学部をもとに、河合塾『栄冠をめざして』昭和44年度を参考に偏差値をアフター・コードをおこなった。

(5) 私立中学出身者のうち、男子については85.7％が大学に進学し、女子については69.3％が大学に進学しており、男子の大学進学率が女子の進学率をかなり上回っていることからも、この私立校への進学における差異が子の学歴獲得におけるある一定の方向性を示していると考えられる。

また、サンプルが文京、町田といった高階層地区を含むことから、ここでの私立校への進学率は東京都全体よりも高い値を示していると考えられる。

(6) 直井優・川端亮・平田周一は、「女性個人の社会的地位を、夫の社会的地位、本人の実家の社会的地位、および夫の実家の社会的地位と、相互連関にあるものとして構成する」として分析している（1990、19頁）。また直井道子は女性の階層的地位について、従来の階層研究における、女性は世帯主である夫の地位を共有することを前提とした「地位の借用モデル」に対し、女性自身の地位を基準とする「独立モデル」、それらの中間に位置する「分有モデル」をたて、この３つのモデルの有効性について論じている（1990）。

(7) 妻学校歴と夫学校歴との組み合わせは、妻の就業や夫の職業との関連強い関連を有している。妻学校歴より夫学校歴が高いケースにおいて、妻の専業主婦、夫の管理職の比率が高く、妻学校歴と夫学校歴が同等のケースにおいては、妻のパート、夫の事務・サービス業の比率が高く、また妻の学校歴が夫の学校歴より高いケースにおいては、妻の自営・家族従業員、フルタイム就業、夫の自営・家族従業員、生産工程・現業の比率が高くなっている。

(8)「男らしく・女らしく」と「男女の区別なく」という教育観の間では、中学校偏差値においてＴ検定5％有意、高校偏差値において1％有意。また、「学歴で

決る」と「学歴とは関係がない」という教育観の間では、中学校偏差値において1％有意、高校偏差値において5％有意。

文　献　一　覧

天野正子
1988、「『性（ジェンダー）と教育』研究の現代的課題－かくされた『領域』の持続」、『社会学評論』155号
Bourdieu, P
1970（1991）、『再生産』、宮島喬訳、藤原書店
岩永雅也
1990、「アスピレーションとその実現－母が娘に伝えるもの－」、岡本英雄・直井道子編『現代日本の階層構造4女性と社会階層』、東京大学出版会、pp. 91-118
神田道子他
1985、「『女性と教育』研究の動向」、『教育社会学研究』第40集
森繁男
1992、「『ジェンダーと教育』研究の推移と現況－『女性』から『ジェンダー』へ－」、『教育社会学研究』第50集
直井優・川端亮・平田周一
1990、「社会的地位の構造－家の力－」、岡本英雄・直井道子編『現代日本の階層構造4女性と社会階層』、東京大学出版会、pp.147-164
直井道子
1990、「階層意識－女性の地位借用モデルは有効か－」、岡本英雄・直井道子編『現代日本の階層構造4女性と社会階層』、東京大学出版会、pp.147-164

Key Words（キー・ワード）

School Career（学校歴）, Gender Difference（性差）,
Educational Investment（教育投資行動）, Educational Attitude（教育観）
Educational Status（教育的地位）

School Career of the Child and Gender Differences

Shigeru Kubota* and Michiko Naoi**

* Graduate School of Social Science, Tokyo Metropolitan University
** Tokyo Gakugei University

Comprehensive Urban Studies, No.52, 1994 pp. 27-42

The aim of this paper is to clarify the process by which children are ranked by the educational system according to their gender differences. The main dependent variable is the school careers of children, which are indicated by the rank of their schools.

Firstly, in this analysis, the relationship between child gender and his/her school careers was overviewed. Secondly, the same relation was tested by controlling his/her mother's school career. Thirdly, the relations were again analyzed controlling the combination between his/her mother's and father's school careers. Finally, educational investments and educational attitudes of the mother were investigated in relate on to the gender difference of the child.

It was found that the school careers of children whose mothers were high school graduates and junior college graduates tended to differ between boys and girls ; and if school careers of the mother were lower than the father's, the child's gender differences were inclined to be emphasized. Accordingly, close interrelationships between the three variables : mother's school career, educational attitude and the gender differences, were demonstrated.